

平成 30 年度「教職課程担当教員養成プログラム」活動報告

久恒 拓也 (広島大学)

はじめに

広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻(教育人間科学専攻(博士課程後期))は、平成 19 年 9 月から平成 22 年 3 月にかけて、「Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」(平成 19 年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム)に取り組んだ。同プログラムでは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成が目指された。同プログラムは、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものであり、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育の在り方を見直すものでもあった。

以上の目的を引き継いで、同プログラムは平成 22 年度から「教職課程担当教員養成プログラム」(以下、教職 P)として実施されている¹。本章では、本年度の活動を、正規教育課程に関する部分を中心に概述する。

1. 教員養成学講究・大学教授学講究

(1) 教員養成学講究

教員養成学講究では、教員養成の歴史・制度を学ぶとともに、「教職科目」のシラバス分析を積み重ね、最終的に履修生がオリジナルのシラバスを 1 科目分作成する。それぞれの取り組んだ科目は下表に示すとおりである。

表 A 教員養成学講究取り組み内容

履修院生	シラバス作成科目	シラバス分析科目
A	生徒指導論	兵庫県立大学 / 教育方法・技術論
B	教育方法・技術論	滋賀県立大学 / 教育方法の理論と技術
C	道德教育指導法	兵庫教育大学 / 教育方法論 京都教育大学 / 教育方法・技術論
D	教育の社会と制度	教職入門 (鳴門教育大学、山口学芸大学、鳥取大学、環太平洋大学)
E	—	

(2) 大学教授学講究

履修一年目の後学期に開講される大学教授学講究においては、大学教育ならびに講義・演習等の教授行為に関する探究課題を院生自らが設定し、調査・研究内容を発表する演習が行われている。

表 B 大学教授学講究取り組み内容

履修院生	レポートタイトル
A	教職科目におけるアクティブラーニング
B	スイスの教員養成課程の科目に関する一考察—チューリヒ大学教育科学科（Erziehungswissenschaft）の授業に着目して—
C	広島大学における「教養ゼミ」の回顧と展望
D	高等教育における映像資料の活用方法に関する研究

2. 教職授業プラクティカム

「教職授業プラクティカム」は、履修生が TA として講義・演習等に入りながら、最終的に1回のコマを担当する「教壇実習」をメインとした科目である。教育の補助者から仕手へと立場を変える中で、慣れない“責任ある”教育実践者としての立ち回りを要求される。プログラム履修2年次において広島大学開講科目で前後期にそれぞれ1回、3年次には他大学で1回の計3回教壇に立つ。

加えて、事前に授業検討会を設けて、1時間程度はその指導計画案について吟味する（事前検討会）。検討会には授業提供教員と TA 指導教員（一般的にはメンター教員あるいはファシリテーターと解される存在）、他のプログラム履修院生が参加し、授業の目的や資料の適切性、時間配分、なぜその教育方法を採用するのか、などが話し合われる。履修生は教壇実習当日までに、検討会で指摘された事項をもとに、指導案を修正することになる。下表は本年度に実施した教壇実習の一覧であるから、参照されたい。

教壇実習を終えた履修生は、事前検討会と同様のメンバーとテーブルを囲み、実施後の授業検討会を行なう（事後検討会）。自身の実習についての振り返りを行ない、次の実習に活かす。

表 C プラクティカム日程一覧

	No.	実習実施日	実習院生	授業名	題材・内容
前期	1	5月21日	F	道德教育指導法	いのちの教育
	2	5月22日	G	幼児教育学	環境を通じた幼児教育(2) —日本の幼児教育における環境
	3	7月23日	H	教育課程論	教育課程の編成原理に迫る —学問的要請を中心に—
	4	7月24日	I	生徒指導概論※	「特別なニーズ」に対する生徒指導の再考 —病弱教育の視点から—
	5	7月24日	J	教育方法学演習	「いま求められる授業づくりの転換」をテーマとするグループディスカッション
後期	6	11月12日	G	教育と社会・制度	教育職員の資格・養成制度
	7	11月21日	F	教育哲学	ケースメソッド—「推薦状はだれのために？」
	8	1月24日	H	教育方法学	授業分析を書く
	9	1月16日	K	教職入門※	授業をつくる
	10	1月28日	J	教育方法・技術論	子どもによる課題の生成と主体形成

※広島大学以外で実施（履修3年目で行うプラクティカムⅢ）。

3. 教職教育ポートフォリオ

3年間の取り組みは、授業理念の形成によって締めくくられる。授業理念そのものは履修のどの年次からでも抱いておき、各々で磨いていくべきだが、それをまとめた文章にする機会として「教職教育ポートフォリオ」の作成が課せられている。

ポートフォリオの授業では担当教員の導きを頼りに、授業理念（あるいはティーチング・フィロソフィー、教授哲学と表記する者のいる）を推敲し、完成させていく。また、理念を記すにあたってエビデンスとなる成果物を、ポートフォリオに整理して蓄積する。教職課程担当教員養成としてどうありたいか、そのためにどういったことを意識するべきか、自分の学んできたことはどう生かせるのか、これらが主要な記述内容となっている。

平成30年度は2名のポートフォリオ提出者がおり、無事修了証書を授与された。彼らの記した教授哲学・授業理念の中心点のみ、下に引いておく。

教職課程科目担当教員養成プログラムに参加した3年間を振り返ってみると、教職科目の授業を通して育てたい教師像は一貫してきたといえる。その教師像とは、「教育学の知識習得や他者との対話を通して、自身の教育観を常に更新し続けていくことができる教師」である。

…中略（ポートフォリオを作成する〈引用者補足〉）中で、教職科目の授業を通して育てたい教師像である「教育学の知識習得や他者との対話を通して、自身の教育観を常に更新し続けていくことができる教師」とは、学生だけに対してではなく大学教員である自分自身においても同様ではないか、と考えるようになった。つまり、「教育（者）⇄研究（者）の往還」というプロセスを、「授業者-学生」「学生-学生」間の相互作用によって経験していく場所が「教職科目の授業」ではないか、ということである。授業者の研究関心を授業に関連付けていくことで、学生は「研究者の視点」から教育をめぐる事象を捉えることができるようになる。同時に、授業に対する学生の考えを汲み取り共有していくことは、授業者自身の教育観を揺さぶり研究活動に援用する契機にもなり得る。

このように、「研究活動を授業に活かす／授業経験を研究に活かす」という有機的なサイクルを継続しながら授業づくりに取り組んでいくことで、自分自身が「研究者」「教師教育者」として、教員養成に少しでも貢献していきたいと思う様になった。

—履修院生 I—

私は、教職科目を通して、教育学の知見を獲得するなかで自らの教育観を確立するとともに、教育の現場で「今、何をすべきか」を、常に自らの教育観と目の前の子どもとのあいだで問い、教育実践を構想することができる教師を育てたい。・・・
（中略）・・・

このような教師を育てるために、私もまた大学の教壇に立つ「教師」として、次のような授業をしたい。すなわち、教育学の知見を具体的な実践事例を通して教授するとともに、その事例や教育学の知見に対する学生の解釈や議論を組織する授業である。そうすることで、学生の自己活動を引き出し、自分なりの教育観を確立することを援助したい。また、学生の解釈や議論から、私自身も自らの教育観と授業づくりを問い続けていきたい。

—履修院生 K—

おわりに

これまで述べてきたような教職 P の実践は、様々な方の支援があつてこそ行なえるものである。末筆ながら、運営に携わって下さった教職員の皆様、学外プラクティカムを受け入れていただいた山口大学の熊井将太先生、広島都市学園大学の森下真実先生、共同研究を進めるにあたりご協力いただいた先生方・教職科目の履修生各位、運営の補助にあつた院生諸氏、そのほか多くの方々に心より感謝申し上げたい。

注

¹ 具体的には、3年間通じて次の教育課程を経る。博士課程後期1年次生は、前後学期を通じて、2つの授業（「教員養成学講究」と「大学教授学講究」）を履修し、教員養成制度の歴史や大学での教授法を学ぶ。博士課程後期2年次生は、学内（広島大学）で前学期・後学期各1回、計2回の教壇実習に取り組み、博士課程後期3年次生は、学外（他大学）において教壇実習に取り組む。

教壇実習は、履修生1名に対して、教員が2～3名（指導教員1名、教育指導を担当するTA指導教員2名）で指導にあたる。教壇実習の前後には、実習生が作成した指導案および授業の構想について議論をする事前検討会と、実習生が実施した授業について議論をする事後検討会が開かれる。指導案や授業をもとに議論をする中で、専門が異なる教員や履修生の授業についての考え方や授業の見方に触れることで、多角的な授業改善が促進される場として設定されている。事前検討会、事後検討会の後、履修生は授業の再構成、リフレクションを行なう。

博士課程後期3年次生は、教職 P の総仕上げとして、「教職教育ポートフォリオ」を作成する。プログラムを履修する中で、自分が何を学んだのかを振り返り、自身の「授業哲学（授業理念・教授哲学とも）」をまとめる。彼らには「修了証書」が授与され、2018年度までに19名の修了生が誕生した。